

The Pragmatics Society of Japan 日本語用論学会

$oldsymbol{oldsymbol{arsage}}$ EWSLETTER

http://www.pragmatics.gr.jp

No.41 / Spring 2019

会 長 加藤 重広

事務局 〒606-0847 京都市左京区下鴨南野々神町 1

京都ノートルダム女子大学 国際言語文化学部英語英文科 小山哲春 研究室内

事務局連絡先 <u>secretary@pragmatics.gr.jp</u>

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

ゆうちょ銀行 〇九九支店 当座預金 店番号 099 口座番号 0130378 日本語用論学会

《会長メッセージ》 オントロギーなき時代

日本語用論学会会長 加藤 重広(北海道大学)

しばらく前のこと、予約したJRの切符をまとめて券売機で受け取ろうと操作していたら機械が「発券しています、発券しています」と繰り返しながら、指定券などを吐き出し始めました。そのときは、「発券する」は瞬間動詞のようなものなので「発券している」と言うのはおかしいだろうと思ったのですが、機械の発券そのものは十数秒かかる持続行為で、「発券する」が継続動詞なら「発券している」もありうるなあと考え直しました。それでも、違和感は消えず、今でもたまに同じ状況で「発券しています」と言われると、違和感を覚えます。

最近、その違和感の正体に少しばかり気づきました。窓口で駅員から切符を買ったり受け取ったりするときには、駅員は「はい、発券しています」などとは言いません。おそらく、二十枚の切符を出すときでも、まず「ではこれから発券しますね」と言い、「はい、一枚目、二枚目……」とか、「まず、X駅から Y駅までの分、それから Y駅から……」のように言うだろうと思います。

昭和時代には長らく窓口で人間から長距離の切符を買い、平成の後半くらいから機械で買う

ようになったので、券売機や発券機のような機械は窓口の人間の仕事を代替するものだと思っていたのですが、人間なら決して言わないことばを機械が発することに強い違和感があったのです。機械は人間の代わりではなく、機械として切符を買う人間、つまり、私とコミュニケーションしていたわけです。機械が人間のようにコミュニケーションしていないことは、考えてみれば、ごく当たり前のことです。

世間は、人工知能ブームのように見えます。この場合の AI は、人間の発話をうまく捉えて命令として理解できる入力装置か、適切な調整をおこなうプログラムと集積回路を指しているのかもしれません。音声知覚技術の発達と発話認識技術の発達はめざましく、20 世紀のころには実用性のなかった技術が今では実用化されています。それはそれで素晴らしいことに違いないのですが、以前には盛んにおこなわれた「知能とは何か」といった議論はあまりおこなわれず、技術としてのアウトプットさえあれば、AI と呼ばれ、知能と呼ぶべき実質があるかどうかは考えられていないわけです。

1980 年代(昭和時代)までは、テクノロジーはあまり進んでいないのに、どのようなやりとりがなされれば知能と言えるのかという議論は盛んでした。J. サールは、語用論研究においてはスピーチ・アクトの成果を論じることが多いのですが、情報工学や哲学の領域では、「中国語の部屋」という思考実験で知られる言語哲学者と

みられることも多いようです。この話を詳しく 論じるには紙幅の制約があるので、ここでは割 愛しますが、要するに、話しかけた相手が的確に 発話を返してきたら、会話は成立しており、2つ の知能があると見てよいのか、という問題につ ながります。

もちろん、知能とは何かというテーマは消えてなくなったわけではないのですが、一方通行でも会話が成立している局面が見えれば、それは人工「知能」と現在は見なされているようです。 AI スピーカーを指して、これが知能なのか、と疑問に思う人はそれほど多くないのかもしれません。装置としてのスペックやアウトプットを把握していれば、特段の文句はないのでしょう。

オーストラリアの SF 作家グレッグ・イーガン (Greg Egan)は、『順列都市』(Permutation City)な どで知られていますが、Diaspora(邦訳も『ディ アスポラ』)という作品も発表しています。この 作品は、いきなり 30 世紀の都市コニシポリス (Konishi polis)を舞台として始まり、その市民は ソフトウェアになっています。さまざまな文学 作品に接していると、時代や地域などが大きく 異なる場合、いまの世界知識が通用せず、十分に 内容が理解できないという経験をするものです が、この作品の中では既に人格を電子的に複製 できる技術が確立し、大部分がソフトウェアに なって暮らしています。市民(citizen)は、conscious software which has been granted a set of inalienable rights in a particular polis と定義され、「意識を持 つ」ことや「剥奪し得ない権利一式を与えられて いる」ことはわれわれと同じですが、この定義の 主名詞は「ソフトウェア」なので、モノですらな くソフトウェアとして市民が存在しているので す。

ここには、人間とは何か、意識とは何か、知能 とは何か、といった本質論が必然的に関わりま す。「市民」のほかに、ごく少数の現生人類と同 じ肉体人(flesher)や意識を持つ、ヒト形のロボッ ト(gleisner)など物理的な存在者も出てきます。個 人的には機械の体になるなんて機械伯爵が出て くる『銀河鉄道 999』というアニメみたいだと 思ったり、コニシポリスという都市名(シベリア の地下 200m にある) やイノシロウという人物名 に、昔見た『ブレードランナー』という映画の雰 囲気を思い浮かべたりし、最後は宇宙への移住 や探検という形のディアスポラというそれほど 珍しくない話になりますが、ともあれ、そこまで の世界描写の作り込みの完成度には圧倒された のでした。もちろん、文系人間は挫折必定と言わ れる、このハードな SF 作品をここで紹介したい わけではなく、不可避的に本質論が関わる状況 があると強く感じたことを思い出したに過ぎません。

語用論に限らずどの領域でも、学術的な進展 によって細分化・専門化・高度化が進むにつれ、 本質論から遠ざかってしまうものです。1980年 代までの本質論が盛んだった時期(昭和時代)と、 専門化が進んだその後の30年(平成時代)を比 べると、本質論が衰退するのが不可避の流れで あることは分かります。AI 搭載の家電を使うの に、知能の何たるかを議論する必要はないとい う現在の空気はその結果のようにも思えます。 80 年代にはオントロギー(存在論・存立論・本 質論)といった用語を見かけることがよくあり ましたが、近年は私の注意力の低下を割り引い ても、以前ほどは目にしなくなりました。いわば 「オントロギーなき時代」なのです。もちろん英 語読みで「オントロジー」と言っても構いません が、やや懐古的にドイツ語読みをここでは使い ます。オントロギーとは、出発点であり、拡散し ていく研究のなかで道に迷ったときに戻るべき 場所のようにも思うのです。

古典落語に『抜け雀』という演目があります。 そこでは屏風から飛び出して鳴く雀の絵を見た 老絵師(実は、雀を描いた若い絵師の父親)が、 「この雀はいずれ死ぬぞ」と言う場面がありま す。屛風の絵に止まり木がないので、休むことが できず死んでしまうと言って、止まり木のある 籠を老絵師は描き加えるのです(これは最後の サゲにもつながります)。常に最先端の細かなる ばかりを見ていないでときには本質論に戻る余 裕が重要なのではないかと思います。いわば、オ ントロギーは止まり木のように、一旦戻って全 体を見渡す場所たりえるのではないかと思いま す。

日本語用論学会は、昨年度から優れた大会発表を顕彰する制度を設けました。若い研究者の方には、先端的な研究を軽やかに飛びつつも、本質論への目配りも忘れない、視野の広い研究を展開させて欲しいと願っています。

現在の執行部は現在二期目で任期は今年度末までです(よって会長としてここに私がメッセージを寄せるのは、これが最後になります)。今年度の後半には、来年度以降の新会長と新執行体制が決まるものと思います。われわれ現執行部の任期は令和元年度末までですが、今後とも語用論の研究を一層発展させるために、会員のみなさまのご協力とご支援を賜りたく、末筆ながらお願い申し上げる次第です。

(加藤重広)

日本語用論学会第22回大会ご案内

2019 年度の第 22 回大会は、以下のとおり、京都外国語大学(京都市右京区)での開催となります。会員の皆様の発表ご応募・ご参加をお待ちしております。なお、未確定部分につきましては、確定次第、順次 HP で更新していきますので、ご確認ください。

◆日程:11月23日(土)、24日(日)

◆場所:京都外国語大学1号館5階

〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6 http://www.kufs.ac.jp/en/index.html

TEL: 075-322-6012

◆ 大会テーマ:

「言語の共有・進化・適応をめぐる語用論」

◆主なプログラム

時間帯などの詳細は追って発表しますが、大 まかなプログラムは以下のとおりです。

≪11月23日(土)≫

- ☆ 口頭発表①
- ☆ ワークショップ
- ☆ ポスター発表
- ☆ 会員総会
- ☆ 招待講演 "English as a Lingua Franca: The Pragmatic Perspective"
- ◆講師 イシュトヴァーン・ケチュケーシュ先生 (ニューヨーク州立大学 名誉教授)

Dr. Istvan Kecskes (University of New York, Albany)

ニューヨーク州立大学のイシュトヴァーン・ ケチュケーシュ先生をお迎えして招待講演を行 います。アメリカ語用論学会会長であり、Chinese as a Second Language Research 編集長でもあるケ チュケーシュ先生は、第二言語習得、バイリンガ リズム、社会認知的な語用論などについて幅広 く研究をされています。今回は近刊の"English as a Lingua Franca: The Pragmatic Perspective" (Cambridge University Press、2019 年 12 月出版)よ り、リンガフランカとしての英語を題材に、グ ローバル化が語用論理論に与える影響について、 社会認知学のアプローチからお話しいただきま す。ケチュケーシュ先生にはほかにも"From Pragmatics to Dialogue" (共編著、Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, 2018), "Current Issues in Intercultural Pragmatics" (共編著、 Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 2017) "Intercultural Pragmatics" (著書、Oxford University

Press、2013) など数多くのご著書があります。ケチュケーシュ先生のご研究の詳細については以下のリンクをご参照ください。

https://www.albany.edu/faculty/ikecskes/ https://www.albany.edu/communication/i_kecskes.php

◆講師 Istvan Kecskes 先生

Dr. ISTVAN KECSKES is Distinguished Professor of the State University of New York, USA. He teaches graduate courses in pragmatics, second language acquisition and bilingualism at SUNY, Albany. Professor Kecskes is the President of the American Pragmatics Association (AMPRA) and the CASLAR (Chinese as a Second Language Research) Association. He is the founder and co-director of the Barcelona Summer School on Bi- and Multilingualism, and the founder and co-director of Sorbonne, Paris – SUNY, Albany Graduate Student Symposium.

His book "Foreign Language and Mother Tongue" co-authored by Tunde Papp and published by Erlbaum in 2000 was the first book that described the effect of the second language on the first language based on a longitudinal research. Dr. Kecskes' "Intercultural Pragmatics" published by Oxford University Press in 2014 is considered a groundbreaking monograph that shapes research in the field. His latest books are "Current Issues in Intercultural Pragmatics" published by Benjamins in 2017, "Explorations in Chinese as a Second Language" published by Springer in 2017 and "Key Issues in Chinese as a Second Language" published by Routledge in 2017. He just completed a new book titled "English as a Lingua Franca: The Pragmatic Perspective" to be published by Cambridge University Press in 2019.

☆懇親会

≪11月24日(日)≫

- ☆ 口頭発表②
- ☆ シンポジウム

「音声・言語・こころ:ヒトのコミュニケーションの進化的起源をいかに捉えるか」

言語・コミュニケーションとそれらを可能にするヒトのこころの進化的起源についての研究動向を俯瞰し議論します。講師・司会として文部科学省新学術領域「共創的コミュニケーションのための言語進化学」メンバーが登壇します。本領域は「階層性」と「意図共有」を2つの柱として、これらの融合としての言語進化(共創言語進化)のメカニズムを解明し、コミュニケーションの未来と人類の存続のあり方を提言することを

目指すものです(http://evolinguistics.net/)。近年の言語進化研究の全貌を紹介するとともに、語用論と関わりの深い音声および意図共有の果たす役割に着目して議論します。

登壇者:

岡ノ谷一夫(東京大学) 香田啓貴(京都大学) 橋彌和秀(九州大学)

司会:

松井智子(東京学芸大学)

言語の起源を進化生物学的な視点から論じ、コミュニケーションにおける語用論的側面の意味を新たな視点から見直す貴重な機会です。ぜひお誘い合わせてご参加ください。シンポジウム詳細については追ってお知らせします。

◆ 発表募集

発表言語は日本語と英語のいずれかで、発表 形態は、口頭発表、ポスター発表、ワークショップの3種類です。なお、ワークショップにつきま しては、一つのテーマについて様々なアプロー チから深く検討し研究者の交流が図れる良い機 会でもあり、今後も一層促進していきたいと思 いますので、皆様是非奮って応募いただきます ようお願いします。以下に応募要領を示します。 公募日程は以下のとおりです。

- 投稿締め切り:2019年7月31日(水)
- 採否通知:2019年9月下旬
- 大会発表要旨(Abstract)原稿締切: 2019年10月11日(金)
- 大会発表論文集(Proceedings)原稿締切:
 2020年3月31日(火)

①申し込み資格

申し込みに際しては、口頭発表の第一発表者 (もしくはワークショップの代表者) が会員で ある必要があります。

②発表形態

- 1) 口頭発表: 発表 25 分+質疑応答 10 分
- 2) ポスター発表:1時間(掲示時間)
- 3) ワークショップ:1時間40分(司会者を含めて3名以上の団体)

③発表言語

日本語もしくは英語

④発表申し込み

発表要旨は「マイページ」から投稿してくださ

い。投稿受付ページは6月初旬に稼働予定です。 投稿の方法はHP上で後日紹介します。

⑤申し込み原稿の形式

申し込み原稿の体裁:発表の種類にかかわらず、申し込み原稿はすべて同じ体裁です。

用紙サイズ: A4

規定文字数:日本語 2,500 字以内、英語 500 words 以内。文字数(日本語)もしくは word 数(英語) を、原稿の末尾に記入して下さい。

ファイル形式: Microsoft Word 形式(doc、docx)、PDF 形式(pdf)

- ・氏名と所属は記入しないでください。
- ・発表タイトルの後に、1行空けて本文を記入してください。
- ・ワークショップは、全員分の要旨を規定文字数 以内に取りまとめてください。
- ・文字数と word 数の数え方については、例文、表、キャプション、注釈を含みます。ただし、図形内のオブジェクトに添えられた文字や、参照文献は含みません。日本語原稿の中に英語のアルファベット等の半角文字を含む場合は、半角文字で2文字を、全角文字の1文字とみなします。
- ・参照文献のフォーマットは『語用論研究』に準 じます。また、規定から逸脱した形式、ファイ ルで応募した場合は、不採用となることがあり ます。

⑥申し込み原稿の留意事項

申し込み原稿には、表現や構成のわかりやす さと説明の一貫性が求められます。また、以下の ような点について過不足なく論じる必要があり ます。

- ・問題となる現象
- ・その現象についての先行研究と問題点
- 現象の分析に用いるデータ
- ・現象の分析方法
- ・現象の分析結果
- 分析結果に基づく結論と理論的含意

⑦申し込み制限

一人の会員が申し込みできるのは一大会につき 2 件まで (Workshop を 「含む」) です。ただし、このうち第一発表者 (または Workshop の Coordinator) として申し込みできるのは 1 件に限られます。

⑧二重投稿の禁止

口頭発表・ポスター発表・ワークショップへの

発表申し込みにおいて、二重投稿を禁止します。 大会運営委員会が二重投稿と認めた場合、その 申し込みを受理せず、また次年度の大会での、当 該の申込者を発表者に含む発表申し込みを受理 しません。

※1. 二重投稿とは、他の学会で既に発表した、もしくは発表の申し込み中である内容、また、既に学術的刊行物に掲載された、もしくは投稿中である論文と極めて類似する内容で申し込みをすることです。

※2. 学士論文、修士論文、博士論文は、まだ公表・ 出版されていない場合には、「学術的刊行物」に 含めません。

※3. 既に学会の発表や学術的刊行物への応募で 不採択が決定している内容での申し込みは、二 重投稿に含めません。

⑨選考結果

選考結果は 9 月下旬に第一発表者に通知します。

⑩発表会場に現れない、もしくは、ポスターを 貼ってあるだけで説明員がまったくいない」な どのいわゆる"No Show"に対する措置

発表が採択されたにもかかわらず、大会当日に大会運営委員会に無断で発表を行わない、もしくはポスターの掲示のみで説明を行わない場合に、これらを"No Show"とみなし、本学会の HPにて公表します。ただし、事前もしくは当日に、また、やむをえない場合には事後に、発表を行えなかった合理的な事情の説明があった場合には、「キャンセルされた発表」とみなします。

◆問い合わせ先

E-mail: presentation@pragmatics.gr.jp

(大会発表委員長・野澤 元 宛)

投稿に関するお問い合わせは、7月17日(水) までにお願いします。

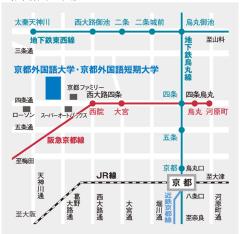
◆ 第 22 回大会会場・京都外国語大学への交通・ 宿泊

[交通について]

★阪急京都線「西院」駅から西へ徒歩約15分。または市バス「西大路四条」(西院)から3・8・28・29・67・69・71系統に乗車、「京都外大前」で下車(所要乗車時間約5分)。

★JR線「京都」駅烏丸口から市バス28系統、 八条口から市バス71系統に乗車、「京都外大 前」で下車(ともに所要乗車時間約30分)。 ★地下鉄東西線「太秦天神川」駅から南へ徒歩 約13分。

[会場周辺図]



[宿泊について]

この時期の京都周辺のホテルは例年混み合いますので、予約は早めにお願いします。場合によっては大阪府や滋賀県のホテルでも JR 京都線・琵琶湖線の沿線なら比較的短時間でご来場になれます。交通機関を確認のうえ、ご利用ください。

* * * 研究会コーナー * * *

◆関東地区研究会

関東地区研究会は、堀田隆一氏(慶應義塾大学教授)を講師に迎え、2019年1月19日(土)に、慶應義塾大学三田キャンパスにて講演会を開催しました。演題は「歴史的観点から見た語用論と統語論の接点」で、当日は参加者による活発な議論が交わされ、終了後には懇親会も催されました。

今年度の開催については未定ですが、決まり 次第、学会 HP や ML にてお知らせいたします。 (尾谷昌則)

◆中部地区研究会

中部地区研究会は、2019年3月7日(木)に、 名古屋大学大学院人文学研究科研究プロジェクトとの共催で、岩﨑典子先生(南山大学人文学部・教授)の講演会を開催しました。

岩崎先生は、アリゾナ大学の大学院を修了された後、マサチューセッツ大学、カリフォルニア大学デービス校、ロンドン大学 SOAS で、言語教

育や第二言語習得などの分野で研究・教育をなさってこられました。2018年9月に名古屋の南山大学に移られ、ますますご活躍されています。

今回のご講演のタイトルは、「L2 日本語話者の発話の「流暢さ」-「聞き手からみた流暢性」を左右する要因-」です。L2 発話の「流暢さ」についてさまざまな先行研究の紹介、ご自身の研究から、日本に留学した学生に対する留学前後のOral Proficiency Interview (OPI)における流暢さの分析など、この分野に詳しくない者にもわかりやすく語ってくださいました。 (北野浩章)

◆中四国九州地区研究会

中四国九州地区では、メンバー間の都合がなかなか合わず、この 1 年ほど研究会を開催できていませんでした。5 月初旬、九州大学で小規模の研究関連のミーティングを持ち、今年度は院生等にも積極的に呼びかけ、研究会活動を盛り上げていくことになりました。次号以降のニューズレターで活動報告を掲載する予定です。(西田光一)

◆メタファー研究会

メタファー研究会では、2018年12月14日(金) ~16日(日)に日本人工知能学会ことば工学研究会と共催で「メタファーを理解するとはどういうことか―心理学的アプローチおよび工学的アプローチ」を関西大学で開催し、84名の参加を得て盛況のうちに幕を閉じました。

電気通信大学 内海彰教授による「メタファーへの計算論的アプローチ」、京都大学 楠見孝教授による「メタファーへの心理学的アプローチ」という二つの講演が行われ、シンポジウムとして「AIはメタファーが理解できるか」をテーマに議論が繰り広げられました(司会:鍋島弘治朗、ディスカサント:楠見孝(京都大学)、内海彰(電気通信大学)、阿部明典(千葉大学)、ジェプカ・ラファウ(北海道大学))。

メタファー関連の発表は以下のとおりでした。 【12月14日(金)】12:20-13:20「何故女の子のほっ ペは赤いのか?」阿部明典(千葉大学文学部/ド ワンゴ人工知能研究所)

【12月15日 (土)】13:30-14:10 司会: 石井康毅 (成城大学)「心理療法とメタファー」菅村玄二・ 串崎真志・池見陽・鍋島弘治朗 (関西大学) 14:10-14:50 Retrieving Metaphorical Sentences from Japanese Literature Using Standard Text Classification Methods Mateusz Babieno, Rafal Rzepka, Sho Takishita, Kenji Araki (Hokkaido University)

【12月16日(日)】10:00-10:40 司会:大田垣仁 (近畿大学)「類似単語を元にしたメタファー生 成の検討 | 梅村奏子(静岡大学(学部))・狩野芳 伸(静岡大学) 10:40-11:20「「丸と温かさ」「四角 と有能さ」の連合に関するメタファー致効果 | 岡 村靖人(追手門学院大学(院)・日本学術振興会) 11:20-12:00「人と機械学習モデルの類推・類似性 判断の差異から人の関係性表現の特質を探る」 加藤龍彦(北陸先端科学技術大学院大学(院))・ 日髙昇平(北陸先端科学技術大学院大学) 13:20-14:00 司会:内海彰(電気通信大学)「順序構造 に注目した感性情報の可視化と表現」水野隆文 (名城大学) 14:00-14:40「動詞を用いたメタ ファー表現の自動生成」 宮澤彬 (総合研究大学院 大学(院)/国立情報学研究所)・宮尾祐介(東 京大学) 14:40-15:20 「直喩文理解を用いた主題と 喩辞の意味活性・抑制過程の実験的検討 平知宏 (大阪市立大学) (鍋島弘治朗)

《「語用論茶寮」の報告》

「語用論のよろず相談サロンです。お茶でも飲みながら気軽にお話ししませんか?」というキャッチコピー(?)とともに、前回大会で初めて開設してみたコーナーです。「茶寮」と書いて「サロン」と読ませる、どこかで見たようなデジャヴ感があるかもしれませんが気のせいです(笑)。

語用論に関わる相談なら何でも来い……、いや、そもそもそんな「相談」なんてあるのか? など、いろいろ迷いもありましたが、まあやってみればいいんじゃない? ということで合意されました。とはいえ、やったはいいけど開店休業だとカッコ悪いよねということにもなるわけで、今回はやや控えめ論が強く、各日約90分の枠とし、それをさらに前後半と分けたところに、それぞれ4人の「話し相手」を置く格好にしました。(「話し相手」は両日あわせて、延べ16人、異なり数で11人でした。)各「話し相手」のところに





は、一応「予約表」のような紙を置き、まあ複数 の希望者がいらした場合にも対応できるよう、 何となく1人20~15分ぐらいを目安とするよう な雰囲気を醸してみました。

そんなわけで(ちゃんと分析もしておらずに すみません…)、"会員に寄り添う学会"を目指す なら、こういう場はあっていいと思いますし、す くなくとももう少し続けていいんじゃない?と 思いますので、たぶん次の大会でも置かれると 思います。ぜひぜひ、お気軽に、お立ち寄りいた だけたらうれしいです。あ、次は時間枠をもっと 長く!と提案したいと思っていますので、皆さ ん来てください!

> (文責・但し懇親会に併設するのはお酒が 飲めなくなるので拒否したい滝浦真人)

* * * 委員会より * * *

★『語用論研究』編集委員会より

S/P 20 の記念号はいかがだったでしょうか? お届けが年度末のギリギリになってしまい大変申し訳ありませんでしたが、来たものを手に取って、いつもの 1.5 倍ほどの厚さもさることながら、豪華な執筆者が並ぶとやっぱカッコいい

よな! と思ってしまったのは私だけではなかったと思います(笑)。

さて、S/P 21 の投稿受付が先ごろ締め切られました。今回は計 17 本の一般投稿を得ることができ(研究論文 15 本、研究ノート 2 本)、筆頭著者の内訳は、大学教員の方が 6 人、大学院生の方が 10 人でした。"支える・育てる"学会誌 S/P の方針を前号に載せたところですが、それを見て投稿しようと思ってくれた方が 1 人でもいらしたなら、大変うれしいことだけど……、と思っています。

学会誌とはやはり、その学会でなされている研究活動を映し出すものと言うべきでしょう。だとしたら、学会誌が寂しいというのは、学会の活動としてやはり寂しい、と言わざるを得ない気がしています。今回の17本から1本でも多くの論文を、世に問えるものとして掲載したS/P21を発刊したい、と願ってやみません。

掲載本数がすべてを表すものではもちろんありませんが、1つの指標として見るのもまた興味深いところです。ためしに、S/P20年の歴史の前1/3と後1/3とで、投稿論文の掲載本数を数えてみました。そうしたところ、創刊からの7号では計33編で、1号当たりの平均が約4.7本であるのに対し、最近の7号では計22編で、1号当たりの平均は約3.1本となりました。平たくいうと、当初は毎号5本近くの論文が載っていたのが、近年の掲載数はほぼ3本、ということになります。平均2本の差は小さくありません。

立ち上げ間もない学会が意気込みをもち期待も背負い、その反映として活気もあったことは想像に難くないところですが、掲載本数で見るかぎりでは、現在の活気はそれには及んでいないと言えるのかもしれません。となれば、まずは創刊時のにぎわいを暫定目標として掲げ、それに追いついたら次にはそれを(軽やかに? 笑)越えていくことを目指そうというのが穏当なところかなあと思う連休明けです。

(文責・編集委員長 滝浦真人)

★プロシーディング委員会より

目下、大会運営委員会(プロシーディングス担当)では、2018年度 第 21 回年次大会で発表された論文をとりまとめ、『大会発表論文集』(Proceedings)(第 14 号)(電子媒体のみの発行)を作成いたしております。ご提出いただきました原稿は、6 月末頃に当学会 HP 上にアップする予定です。

原稿をご提出いただいた会員の方々には、ご協力いただき誠にありがとうございます。

(竹田(内田)らら)

《事務局より》

★平成30年度(2018年度)会計報告案

収入		
	 / m	1.15.45.44

前年度繰越残高	1, 988, 120
年会費 (329 口)	1, 854, 000
一般 269 口 (@5,000/@6,000)	1,599,000
学生 55 口 (@4,000)	220,000
団体 5口(@7,000)	35,000

大会参加費(2日分、251口)	519, 000
現会員事前登録 82 口 (@1,000)	82,000
現会員・新入会員 70 口 (@2,000)	140,000
当日会員 99 口 (@3,000)	297, 000

懇親会費(54 口)	254, 000
一般 38 口 (@5,000)	190, 000
学生 16 口 (@4,000)	64,000

施設(キャンパスプラザ京都)使用料還付金 11,620

合計 4,626,740

支出

合計

大会発表論文集 PDF 作成費 147, 420 印刷費・郵送費 (学会誌・ポスター等)

1, 165, 468

3, 155, 887

事務局諸費	1, 013, 223
人件費	277, 000
文具費・会議費	200, 202
学 全運営活動に対する	

	478, 231
事務業務委託	54, 766
手数料	3, 024

142, 560
142, 560
63, 180
30, 000
154, 476

懇親会 297,000

次年度繰越金 1,470,853

★平成30年度大会会計報告

収入

年会費	52, 000
2日分(9口)	
一般 8 口 (@6,000)	48,000
学生 1 口 (@4,000)	4,000
大会参加費(2日分、251口)	519, 000
現会員事前登録 82 口 (@1,000)	82,000
現会員・新入会員 70 口 (@2,000)	140,000
当日会員 99 口 (@3,000)	297,000
懇親会費(54 口)	254, 000
一般 38 口 (@5,000)	190,000
学生 16 口 (@4,000)	64,000
① 計	825,000

支出

印刷費・送料		119, 408
事務局諸費		471,664
人件費		277,000
文具費・会議費		139, 898
大会関係事務業務委託		54, 766
講師謝金・渡航費		79, 406
懇親会		297,000
2	計	967, 478

 \bigcirc = -142,478

収支 -142,478円

★会費納入のお願い

年会費は、一般会員 6,000 円、学生会員 4,000 円、団体会員 7,000 円でございます。11 月末までに、ご納入いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。学会口座は以下のとおりです。

【郵便振替】

口座番号:00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

【ゆうちょ銀行】 支店名:099 口座種類:当座

口座番号:130378 口座名:日本語用論学会

学会 HP の「会費専用ページ」より、クレジットカード決済も可能です。会員ステータス、会費納入、会員専用ページへのログイン等に関するお問い合わせは、事務局ではなく、下記までお願

いいたします。

日本語用論学会 会員管理室 E-mail: psj@outreach.jp

一昨年度から年会費を変更いたしました。また、三井住友銀行の口座は閉鎖いたしました。ご 負担をお掛けいたしますが、どうぞよろしくお 願い申し上げます。

★激甚災害被災会員の皆様の会費・大会参加費 免除について

日本語用論学会では、平成30年北海道胆振東部地震、平成30年梅雨前線豪雨(平成30年7月豪雨含む)等の激甚災害、またはこれに準ずる災害で被災された会員の皆様に対し、お申し出いただくことにより「2019年度会費」ならびに「2019年度年次大会の参加費」を免除しております。被災地の皆様方の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

免除申請先 (メール、郵送、電話のいずれも可。 ご連絡いただきましたら、手続きの詳細をご連 絡差し上げます。)

日本語用論学会事務局 〒606-0847 京都市左京区下鴨南野々神町1 京都ノートルダム女子大学 人間文化学部英語英文学科 小山哲春研究室内 E-mail: secretary@pragmatics.gr.jp

E-man. <u>secretary@pragmatics.gr.jp</u>

Phone: 075-706-3670

★ 《新刊・近刊案内》★

■『言語の認知とコミュニケーション 意味論・語用論・認知言語学・社会言語学』早瀬尚子(編) 吉村あき子・谷口一美・小松原哲太・井上逸兵・ 多々良直弘(執筆)開拓社(定価 4,200 円+税) http://www.kaitakusha.co.jp/book/book.php?c=1372

認知とコミュニケーションという観点から、意味論・語用論・認知言語学・社会言語学の4分野(ただし本書は5部構成)を取り上げ、これまでの研究成果の積み重ねだけでなく、2018年時点での最新動向も反映させて紹介している。例えば第2部「最新の語用論研究の進展」においては、Griceの語用論、ネオ・グライス派語用論、関連性理論といった定番の内容だけでなく、手

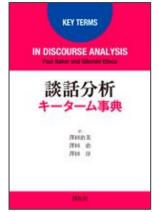
続き的意味の歴史を4つのステージに分けている Carston (2016)の考えを紹介し、「手続き」の性格が大きる現状について詳述している。

本書の特徴は、5 つの部すべてに「最 新の~」という見出 しがついているこ とからも分かるよ



うに、各分野の最新動向を積極的に紹介・検討している点と、各部が「基礎内容部門」と「応用進展部門」によって構成されている点である。後者については、最近よく見られる構成であり、小と者から研究者まで幅広い読者層をターゲットにしていることが伺える。内容を見ても、基礎内容部門では各分野の根幹をなす部分を平易に設め、最新動向を語る応用進展部門へ無理なく橋渡しが行われるよう工夫されている。最新動向とは謳いつつも、示唆に富む重要な問題がいくつも取り上げられているため、その議論は色褪せることなく、今後の言語学発展にとって不可欠な知であり続けることは疑いようもない。(2018.11.27刊)

■『談話分析キーターム事典』澤田治美・澤田治・ 澤田淳(訳) 開拓社(定価 3,800 円+税) http://www.kaitakusha.co.jp/book/book.php?c=2267



本書は 2010 年に 出版 された Key Terms in Discourse Analysis (Paul Baler & Sibonile E. and Ellece 著)の日 本語版である。見た 目はハンディしりまったが、中身はがっしまったが、 中身はいる。 語に タームは 309 語に 要思想家・学者 42 名、重要テキスト 24

冊(邦訳が出ているものはそのタイトルも)の紹介もついている。キータームは「談話分析」と銘打たれているが、その目線は談話分析を起点に文法論、意味論、会話分析、語用論、社会言語学、エスノメソドロジー、文体論、コーパス言語学と

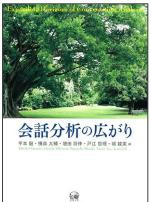
広がり、それらの用語を解説している。

また、もう一つの重要な特徴は豊富な「訳者注」 にある。直訳しただけでは言葉足らずであるための補足や、日本ではどのような例が考えられるかなど文化差を考慮した追加情報、他のキータームとの関連性など、読者の理解の手助けを促す訳注が日本語版オリジナルとして大量に追加されており、読み手側にとって非常に有り難い。

重要テキストに関してはだいぶ絞り込んで選択してあり、読者にとってはそれを土台に、更なる文献を発見してく楽しみもあるだろう。談話分析を行うものにとっては必携の一冊である。 (2018.12.7 刊)

■『会話分析の広がり』平本毅・横森大輔・増田 将伸・戸江哲理・城綾実(編)ひつじ書房(定価 3.600円+税)

http://www.hituzi.co.jp/hituzibooks/ISBN978-4-89476-853-6.htm



論文集というよりも、その構成は計算し尽くされていて、第1章はまず会話分析の広がりを

全般的に概説しており、その後の章を詳しく解説しているため、各章の関連性や発展の歴史もある程度把握できる。第2章から第8章までは、それぞれ多様な連鎖組織、相互行為言語学、マルチモダリティ、フィールドワーク、行為の構成、認識的テリトリー、多言語比較について論じているが、各章で具体的な事例に入る前にかなりの分量を割いてその分野における会話分析の発展について丁寧に詳述しており、「会話分析の発展の可能性を理解してもらうこと、その理解の手助けが事例紹介であること」を徹底しているのだろうと伝わってくる。加えて第9章では第8章までを振り返り、さらなるまとめと投げかけを行っている。

このように、これは単なる論文集ではなく、会話分析の発展や理解に寄与するための体系的な一冊である。(2018.9.18刊)

★広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思いますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報があれば紹介文を添えて広報委員会宛にお送りください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。

PSJ members selected this section's recently-published and forthcoming books on pragmatics. We invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written in your native language are especially welcome.

~編集後記~

- ■この一年間、いつにも増して周囲の方々に支えられ、どうにかここまでたどり着くことができました。感謝を忘れず、少しでも学会に貢献できたらと思っております。 今年度もよろしくお願いいたします。 (秦かおり)
- ■一年があっという間に過ぎました。ずっと奉 仕の精神でこの仕事をしていますが、何より大 事なのは、自分を育ててくれた学会への恩返し や感謝の気持ちでした。研究発表の壇上にはじ めて立った時の興奮と緊張は、実はすぐに忘れ たのですが(笑)、研究上の助言を頂き、知り合 いも増えたことは今もずっと感謝しています。 (尾谷昌則)

日本語用論学会 Newsletter 第 41 号発行:日本語用論学会広報委員会発行日:2019 年 6 月 1 日

[広報委員会]

- * 委員長:尾谷昌則
- * Newsletter 編集担当:秦かおり
- * 公式ホームページ担当:尾谷昌則
- * 会員メーリングリスト担当:金丸敏幸

E-mail: webmaster@pragmatics.gr.jp